

僕とジャック

この物語は、「ジャックと生きる木」～はじめり～」を生きる木目線で描いた、俗にいうアナザーストーリー……スピノンオフ作品的な立ち位置です。

内容がとても難しく、1回読んだくらいじゃ、分からぬかもしないです。
けど、この内容が理解できれば、あなたはもう「ジャックと生きる木」の世界の住民なのでしょう。

※必ず、本編（ジャックと生きる木～はじめり～）を読み終わってから読んでください。

僕とジヤック

0 → プロローグ →

僕の名前は木田祐介（きだ ゆうすけ）。

青春を送っている高校2年生だ。

20XX年12月24日。今夜はクリスマスイブ。世の中が沸き上る日だ。

僕も今日は彼女とデートをする予定がある。

正午に駅で待ち合わせをしている。

つと、そんな話をしていると彼女が来た。

「おまたせ！ 待った？」

「うんうん。全然待ってないよ！ そっちのやうやんね、こんな寒い日にトートだなんて」「全然いいよ！ 祐介君とデートできるんだから！」

彼女は清水響子（しみず きょうこ）。一言でいうとかわいい。名前に「清」や「響」がついているように、声がきれいなんだ。僕は、彼女が声優とかに向いていると思う。

「響ちゃんは、今田ジンに行きたい？」

「うーん……私はリピセンターに行きたいな！ あそこなら何でもあるし！」

リピセンターは、街の中央部にある複合型ショッピングセンターだ。服や雑貨はもちろん、アトラクション施設などもある。

「わかった！ ジャあ行こうか！」

「うん！ 私、楽しみ！」

1 ↴悪夢は突然訪れる ↵

今日はいつもより空が暗い。今日の天気は晴れなのに。

「ねえ祐介君……なんか今日の空、暗いね……」

「そうだね……」

そんなこと思っていると、空がどんどん暗くなる。
おかしい。まだ昼間なのに空が真っ暗だ。

「ねえ……これって……」

暗雲があるわけではないのに、雷鳴が鳴る。

「わっ！ びっくりした……近くに落ちないといいね……」

と、彼女が言った瞬間に、目の前に雷が落ちた。

その瞬間、地面や建物が粉々になり、空に舞う。自分たちも空に浮かんでいく。

「えつ」

どんどんと飛ばされていく。

地面が塵になつて消えた。周りの人たちが次々に消えていく。

「自分も消えてしまうのかな……？」

そう独り言を言つていると、自分に雷が当たつた。

痛いという感覚を感じる間もなく、意識が遠のいていく……

2 ～木化～

「うう……はつ！」

気が付いて起きると、自分は森にいた。

「助か……ったのか？」

立つて動こうとしても体が重い。

「なんでだろう……体が……重い……」

自分の足元を見てみると、自分の足に木の枝が絡みついていた。

いいや違う！ 自分の足が木になつているんだ！

「あ、ありえないだろ！」

よく見てみると、自分の腕も木になつている。

自分は木になつてしまつたんだ。

「とりあえず、どこかに人がいなか探そう！」

自分は重い足を動かしながら探しに行く。

ずっと探しまわっていたら、自分と同じように、花になつてしまつたり、苔（こけ）になつてしまつた人と会えた。

「どうやら、みんな僕と同じ感じなんだね……」

僕がそういうと、ひまわりが喋る。

「あの……僕、なんでこうなつたか分かります」

「えっ？ それ本当なの？」

「はい……。実はある研究をしていて、その研究の中で、魔王の存在に気づいたんです」

「魔王……か。」

にわかにも信じがたい話だ。

「ええ。この世界を魔王が支配するという計画を発見しました。その計画を調べていたら色々なことが分かつたんです。」

ひまわりが続ける。

「ちょうどクリスマスイブの午後2時に、装置から特殊な電磁波が発生して、空が暗くなり、

雷が発生し、色々な物質を原子へと分解するようなんです」

「つまり、これは計画されたものだと？ バカってるんじやねえの」とげとげしい言葉を薔薇が話す。

「本當です。實際に計画書もあります。研究の結果、特殊な電磁波の発生方法もわかりました。なんなら、あなたにもう一度電磁波を浴びさせてあげられますが？」
負けじとひまわりも対抗する。

「……チツ」

舌打ちをした後、薔薇が続ける。

「じゃあ、元に戻す方法もわかるのか？」

「ええ……元に戻すには、浸食された地面のコアに光のエネルギーを当て続けたり、色々なことをするのが効果的でしょう……」

かなり難しい話をしてるんだろう。全く分からぬ。

「わかった。じゃあ、とつととやつちやおうぜ」

「無理ですよ！ 光のエネルギーを出せる人間たちは消えてしまつたし……」

「そうか……じゃあ、俺らがそのエネルギーを出せるようになればいいんだな？」

なんかすごく無理そうな話をしている。

「あの……そんなの出来るの？」

俺が会話に入れるように喋る。

「さすがに無理なはな……いや！」

「出来るのか。無理そただけど。

「遥か昔の神話では、『人が姿を変えたとき、人に眠る力（アビリティー）が解放される。』と

書いてありました」

「つまり、その力とやらを解放すればいいんだな！」

「はい。じゃあ、私たち生き残った組は、眠った力を開放する作業を頑張りましょう！」
ひまわりが元気になった。

「これから何年掛かるかは、私にも分かりません。でも、私たちは生き残った組なんです。頑張りましょう！」

「ここにそろったメンバーが全員賛同した。
「おー！！」

3 ↗ 植物科の誕生 ↘

僕たちのための基地が建てられ、「植物科」という看板が立てられた。

「植物科って……良いネーミングセンスだな……」

ネーミングセンスを讃められた。嬉しい！

「そうでしょ、そうでしょ！」

「じゃあ、俺らはとつとアビリティーとやらを解放しようぜ！」

薔薇っちがそういうと、ひまわりさんが、どうやってアビリティーの開放をするのかを説明し始める。

「まず……自分の体にマグネシウムの金属板の銅板を刺します。その金属板にコードを接続して、そのコードを「ED 電球につなげるんです。」

金属板の種類が、なんかイオン化傾向とかが関係ありそうな感じだな。そして、発電できそうだ……。

「そして、「ED」が光れば力の解放が完了です。その時、光った色によって自分の力の種類が分かるんです」

力には種類があるのか。

「青色なら速度、赤色なら範囲、緑色なら科学に特化した能力を手にします」「その3種類しかないので？」

薔薇っちがそういうと、ひまわりさんが答える。

「一応、他に2つあって、黄色は光エネルギー、白色は最強です」「光はまだわからなくもないが、最強ってなんだ？」

僕もそれは思った。最強は、その名の通り最強なのだろうか。

「光は、闇に対抗するエネルギー。最強は、すべての能力値が100%なんです」「つまりは、最強っていうことなのか。

「とりあえず、魔王は闇エネルギーでこの世界を支配しているんです。だから、光エネルギーを持つ人が、浸食された土地のコアに、エネルギーを与える必要があるんです」「つまり、光エネルギーの力をもつ人がいないと、やばいってことね……」

僕にしては割とまともなことを言ったと思う。

「そういうことです。ただ、最強が一人でもいれば大丈夫なんですがね……。最強の力を持つ人は、他の人に力を渡すことが出来るんです」「じゃあ、早速やろうよ！」

「いいね！」

みんながそう言うと、ひまわりたんが金属板とコードを「ED」を持ってきた。

4 「リベラルタル」

ひまわりたんは、人に金属板を刺して発電する方法を「リベラルタル」と言うと教えてくれた。

結局発電出来るんだ……？

リベラルタルは、色々なことに応用できるらしい。

この、自分の力を判定するのにもリベラルタルの応用技らしい。

「じゃあ、僕やるね……」

と、4ページの間まったく登場していなかつた苔くんが言う。

「グサツ…………グサツ…………」

「苔くん…………痛くないの…………？」

「うん。音はやばいけど、全然痛くないよ」

グサツって言ってたけど本当に大丈夫なのだろうか。

「苔さん……」「EDにつなげますよ！」

その瞬間、「ED」が眩しく光る。色は…………青色だ。

「青色は……速度に関する力に特化しています」「おお……」

そして、そのまま僕以外全員が「EDを光らせた。苔は青色で速度。薔薇つちは赤色で範囲。シロツメ・クサノ介君は白色で最強。そして、ひまわりたんは黄色だった。

「じゃあ、最後は僕か……」

僕は怖かった。痛そうだし。

「じゃあ、木くん……いくよ?」

金属板が刺された。痛くはなかった。

「おお……あれっ?」

光るはずなのに、明るいどころか、暗くなっている。

「これは……黒だ……!」

ひまわりたんが大きく叫んだ。

「黒? 黒はないはずじや……」

「一応、風の噂程度で聞いた話なんんですけど……黒色に光った者は、何が起きるか分からぬ。もしかしたら、災いが起きたかもしないって……」

うーん……それどこかで聞いたことがないな……。

あ、思い出した!あの……鬼になつた家族を助ける……あの鬼を斬る刀の色に関する伝説だな。あの、鬼を倒す隊に所属して、刀を握つたら色が変わるみたいな話を聞いたことがある。

つまり、これってパク！」

「あ、木くん？ もし心の中でパクリとか思つたら消し飛ばすよ？」

シロツメ・クサノ介君は人間の時はとても優秀だったがおっちょこちょいみたいな、天才と

芸人を足して2で割つたような感じの人間だつたらしい。

「そ……そんな……パクリだなんて思つてないよ！ 殺して滅する刀の話なんて想像してな

いよ！」

「そ……そんなことより、木くんのその「ED」の黒色……大丈夫ですかね？」

ひまわりたんが心配してくれた。

「多分、大丈夫だよ！ 何も起きてないし、そもそも木になつたこと 자체が災いなんだから！」
僕は明るく返した。

「とりあえず、魔王を倒す計画と浸食された土地を戻す計画を立てるよ！」

「なら……魔王を詳しく調べますか……私に任せてください！」

ひまわりたんが元気そうに言つたので、僕はひまわりたんに任せた。
つていうか、なんか勝手に僕がリーダーになつてた。

「いやだつて……木つて一番大きいじやん……」

みんな口々にそう言う。

というわけで、植物科のリーダーになつた僕。

魔王を調べる係のひまわりたん。

後の人は……また後で決めよう……。

5 ↗ 存在に気づく

「あの……木くん……ちょっとこれを見てくれる？」

「そう言ってひまわりさんが資料を見てくれた。

「これは何の資料？」

「最近、魔王を調べるために人工衛星を飛ばして、電波とかを放つて、生存している人間がないか探したんですよ」

「ほう……」

「そしたら……生存している人間の存在を2人見つけたんですよ！」

「マジか！ 生存している人間はもういないと思っていた。」

「それは本当か!?」

「ええ。かなり微弱な反応でしたが。もしかしたら、その人は魔王の存在に気づいていて、自分を守るために、電波を弱くする装置とかが置いてあるのかかもしれないです……」

「つまり、魔王を倒すための有能な人材になるかも知れないと？」

「ええ」

希望が見えてきた。もしかしたら本当に、魔王を倒せるかもしれない。

「それで、コンタクトはとったのか？」

ひまわりたんは少し落ち込んで言つた。

「残念ながら、コンタクトは難しいかと。家が完全防護用要塞みたいな感じで、なんか脱出用の口ケットもあるようですから……」

もしかしたら、コンタクトを取つたら口ケットで逃げてしまふかもしない。

そう考へると、あっちからのコンタクトを待つしかない。

「それと、その人の個人の情報がわかりました」

どうやら「オクパシー・ジャック」とそのお母さんの「モザン・ジャック」の2人家族が住んでいるらしい。

「じゃあ、待つていようか」

「そうだな……」

「あと……魔王の正体もかなりわかつてきました……」

魔王の正体がわかるまで、かなりの時間がかかった。だが、やつとわかつたのだ。

「名前は、『マック・トーマス＝ジャック』

ジャック……！ それってまさか……

「ご想像の通り、戸籍データベースと照合したところ、このジャックという3人は家族です」「そうか……わかつた。とりあえず、俺からみんなに報告する。それまでは言わないでくれ」「わかりました……」

そういうと、ひまわりたんは作業部屋に帰つていった。
「状況が大きく変わったな……」

俺は、植物科のメンバーを集めて、緊急会議を開いた。

「みんな、集まってくれてありがとう。今回はかなり重要な話だ。これによつて計画が大きく
変わらが、浸食された土地は元に戻る。聞いてくれ」

空気ががらりと変わる。

静かになつて、鳥のさえずりまでもが聞こえる。

「まず、生存している人間が確認された」

ひまわりん以外の皆が驚く。

「いや、俺らが森を確認したときは誰も確認出来なかつたはずじゃ……」

薔薇っちが言った。

薔薇っちの言う通り、俺らが目視で確認したときは、家も何もなかつた。だが確かに、衛星
写真には写つてゐる。きっと特殊な加工をしてゐるのだろう。

「そして、魔王の正体も分かつた」

久しぶりに苔くんが喋る。

「それはつまり、倒す対象が決まつたということで良いのか？」

「それは違う。状況が大きく変わつたんだ」

「それはどういう意味だ？」

薔薇っちが入り込んできた。

「今から説明するから！……まず、魔王と生存している人間は血縁関係にあることが分かつた。そして、計画を大きく変更するんだが……ねえ、クローバー君……聞いてる？」

「クローバーじゃなくて……いや、間違つてないけど……シロツメ・クサノ介だよ？　あと、話はしつかり聞いてる。安心して」

いや、ゲームしながらそれを言うか。

「まあいいや……変更する計画は、『魔王を倒す』から『魔王を説得する』にする」

「いや、それは無理だつて、一番最初に言つてただろ？」

「苔つちの意見もそうなんだ……だが、作戦の最終指揮権は私にある。つまり、責任は私が負う。だから心配するな」

「わかったよ……」

「そして、生存している人間とのコンタクトが取れたら俺一人とその人間で城に向かう」

「これはかなり危険な作戦だ。自分でもわかつている。

でも、響子が救えるなら……自分はどうなつても……」

「わかった。木がそう言うなら、きっと立派な作戦を練つてるんだろう。だろ？」

「あ、ああ」

「なら、木に任せてもいいよな！　なあみんな！」

「薔薇っち……！」

やつぱり親友と呼べる関係とは、相手の事を常に思つてることなのだろう。

「うん！ 任せてよ！」

詳しく述べをして、みんなからの承認を受けて、ジャックからのコンタクトがあり次第、作戦を実行することになった。

みんな、任せてくれてありがとう。

7 ～早くもコンタクト～

あの会議をしてから、おおよそ2か月が経った。

「木くん！ ジャックさんが拠点に近づいてきていることを確認しました！」

「本當か！ みんな、最終会議を行う！ 集まってくれ！」

僕の声と同時に「待ってました」と言わんばかりに集まってきた。

「みんな！ もうすぐジャック君が来る！ とりあえず、今日の作戦を詳しく伝える！」

「ああ。教えてくれ」

薔薇っちがクールに答える。

「とりあえず、僕たちは人間が生きていたなんて知らないフリをする。そして、僕が拠点に連れ込む。多分、ジャック君は家にお母さんを置いて行っているだろう。だから、僕が結界を張りに家に行く」

「ほうほう、随分すごい作戦だね……」

苔つちがそう言つたが、僕は続ける。

「そしたら、そのまますぐに、僕とジャック君で魔王の城に向かう。けど、魔王の城の構造はわかつてないんだよ」

もしかしたら迷路みたいになつてゐるかもしない。大変な作戦になるかもしないけど、何とかなるだろう……」

「まあ、とりあえず城に行つて魔王のところに行く。そしたら僕は、魔王を説得する作戦を行う。あとは……何とかなるよね！」

すると、シロツメ・クサノ介君が言う。

「なんか、僕たちが役に立てることがある？」

「2つ、みんなに任せたい仕事があるんだよ」
みんなが、こつちに視線を向ける。

「仕事……教えてくれ」

またも薔薇つちがクールに言う。

「1つ目は、僕とジャック君が帰つてきた時に、すぐに浸食された土地を戻せるように準備をしておいてくれ。そして、もう一つは……」

みんなが息をのむ。

「もう一つは、城の周りを含む、城にいる敵を倒しておいて欲しい……」

僕とひまわりたんの調査では、城の周りにいる敵も含めて、城にいる敵は、おおよそ30万体ぐらいだ。

「かなり過酷な仕事になると思うんだ。けど、是非やってほしい…………出来る？」

みんなは、息を合わせてこう言った。

「もちろん！ 植物科の俺らなら、それぐらいお安い御用だぜ！」

「嬉しい！ 心強い仲間たちだ。」

「じゃあ……お願いするよ！」

8 ～合流～

「木くん！ ジャックさんがいらっしゃいます！ 到着するまでおよそ 1500m-!」

「わかった。じゃあ、行つてくるよ……」

抛点を出ると目の前には人がいた。

作戦通り、人がいるとは知らなかつたような演技をする。

「君は……人間!?」

目の前の人があたし始める。

「ええ。私は、この世界を支配している魔王を倒そうとしている『ジャック』と言います。協力していただけの仲間を募ろうと、この植物科の抛点に参りました」

どうやら、ジャック君は礼儀正しい人みたいだ。

「まだ人間が生きていたのか……！ とりあえず抛点に来い！」

作戦通り、抛点に連れ込む。

そして、拠点に入つて会話を始める。

「そうだったのか。まだ生きている人間がいたのか」「けど、僕とお母さんしか残っていません」

「なんだと！　お母さんは今どこに！」

「え、えっと……家です」

予想通り、家にお母さんを置いてきたようだ。

僕は慌てる演技をする。

「そうか。ならば今日にでも戦いへ出発しよう」

ジャック君が嬉しそうに言う。

「え！　本当にですか？」

「ああ。実は、私たち植物科も、ちょうど今日、戦いに向けて出発しようとしていた所なん₂₀だ。」

「じゃあ、行こうか」

「はい！」

ジャック君は本当に嬉しそうだ。

そういうと、ジャック君はしゃべりかけてきた。

「あの……木さん……」

とりあえず、仲良くしていけるように、同じ高校2年生っていう設定にして、「さん」呼びはやめてもらおう。

「ん？　あ、それより……僕のことは『生きる木』って呼んで！」

「え？ あ、はい。生きる木さん……」

「だから……一応、僕と君は同じ高校2年生なんだからさ、僕らは友達！ 敬語とか使わずに仲良くしていこうね！」

「分かったよ……。い……生きる木！」

「やつた。作戦通りだ。

「そうそう！ ジヤ、これからよろしくね！ ジャック！」

「おう！ 生きる木よ！」

「生きるよ！」もどうかと思うんだけど……まあいいや。

とりあえず、ジャックの家に行つて結界を張る計画をジャックに伝える。

「じゃ、まずはジャックの家まで送つて。そしたら、俺の魔法を使って、結界を張る」「結界つて？」

予想通り、ジャックが結界について気になつてゐる。

僕は説明する。

「お母さんを守るための結界さ。一応この世界の中では、五本の指に入るくらいの強力な結界を張るよ。」

「え？ 木って、そんな強い技使えるの？」

その質問は想定にならないな……。

まあ、適当に流せばいいか。

「まあまあ！ そんなの、気にしないこと！ とりあえず行くよー！」

「お、おう……」

とりあえず、不審に思われないように、知つてはいるけど、ジャックの家の場所を聞くことにする。

「で、家はどこにあるの？」

「この森を北の方向に2ヶ所ぐらい行つたところだよ」「僕は当然知つている。

「おう！　じゃあ、とりあえず急ごう！」

「え？　う、うん！」

ジャックの不安そうな声をよそに、僕はジャックと共に進む。

かなり進んだところで、要塞のような建物が見えてきた。

「ここがジャックの家？」

返事がない。

「おーい……ジャック～？」

何か考え方をしているようだ。

「……おーい！　ジャック！」

「あっ、ごめん……考え方をしていたよ……」

予想通り、考え方をしていた。

そして僕は、計画通り結界を張ることにする。

「じゃ、とりあえず結界を張るから、ちょっと待つって。とりあえず、お母さんに結界を張ることを伝えておいて……」

「おう。頑張つて！」

「じゃ、結界はりまーす……」

「闇の紋章がにじみあがる、彼らは絶えず消滅する」

ジャックは家に向かった。

「たとえ隕石が降ろうとも、全ては再構成され、守り切るだろう」

「自壊と結合を繰り返し、何もかもを元の状態へと戻すだろう！」

「すべてを守れ！ 第九の戦術（アビリティー）『麓解（ろつかい）の輝き』！」

家の周りが麓解（ろつかい）のドームで守られた。

「はあ……はあ……終わったよジャック……」

ジャックは、僕が疲れていることを微塵とも察せずに質問してくる。

「第九の戦術ってことは他にもあるの？」

「……う、うん。でも第九が最強の技だよ」

「じゃあ、もう行こうか！」

「うん！」

「さて、もうめんどくさいから魔王の城に行くか！」

「え？ 早くね？」

たしかに、基地を出てから、30分ぐらいしか経っていない。

ジャックも、家から出て1時間ぐらいだろう。

でも、早く行きたい。

また、響子と会いたい。

「でも、もう行かないと……ね？」

「う、うん……」

ジャックは落ち着いていないようだが、進むしかない。

9 ～Rapidez～

とりあえず、城まで徒步だと20時間ぐらい掛かる。

高速移動の戦術を使えば一瞬だが、レベルが高い第九を使ったから……疲れた。

「第九の戦術が最強だからさ、戦術をリチャージしなければならないんだよ……だから、時間がかかるから、ちょっと待つてね！」

という設定を作つて、休憩をすることにした。

すると、ジャックが話しかけてきた。

「……ねえ、さつきの説明じややっぱりわかんないや」

仕方ないからざつくりと説明しよう。

「ジャックは理解力が低いなあ……RPG ゲームとかやつたことあるよね？」

「そんな感じでと
らえちやつてよ」

「ふーん……」

多分だけど、分かってないな……

そのまま、おおよそ3時間経った。
するとジャックが話しかけてきた。

「木？ リチャージまであとどれくらい？」

まあ、疲れも取れてきたし、そろそろいいだろう。

「うーん、もういいかな？ ジャ使っちゃう？」

「お、やつた！ 高速移動の技は、俺も気になるな！」

その言葉は嬉しい。

「それじゃ、行きますか？」

僕は歩きながら呪文を読み始める。

「タイム＆クリティカル！ 時を加速させろ！ 第二の戦術、『オーバーキープ！』！」

この戦術は、自分に速度上昇効果を与え、光エネルギーのオーラをまとわせて、更に速度を上げる、速度の力と光の力を組み合わせた戦術。

普段使いでは、一番有能な技だ。

「おお！ 速い！」

「どうよ、ジャック！ 僕のアビリティーは！」

「すごいよ！ こんな技が9種類もあるんだ！」

ちょっとだけ説明してあげようか。

「このアビリティーっていうのは、植物科の時にみんなで研究したんだ。そしたら、人々に眠

る技を発見したんだ。」

「へえ。植物科ってすごいね！」

「とりあえず、早く行かなきや。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだよ……」

オーバーキーパーの力で、17時間ぐらい掛かる道を、

そして、城が見えてきた。

「あ、ジャック！ あれが多分、魔王がいる城だよ！」

城からは、まがまがしい雰囲気が出ている。

「なんか寒くなつて來たね……」

「うん……城付近の温度は普通に低いからね……」

そして、城の門の前についた。

「木？ ここがその城であつてるの？」

「うん。あつてのはずだよ」

「じゃあ……入ろうか……」

「……うん」

僕は生きる木と共に進んでいく。

2時間まで短縮できた。

城の周りの敵は、植物科の皆が倒してくれた。

城の中の敵たちも、植物科の皆が倒してくれたようだ。

そのまま城の廊下を進むと、大きな広間に出了。

「お、この部屋は……」

「ロビーみたいなところかな？」

「ねえジャック、このロビーツ、ジャックの家の集落よりも広いよね……」

辛辣に言つてやつた。

「まるで迷路だな」

無視られた。

「ジャックの言う通りだねー（棒）」

ロビーは薄暗く、沢山の部屋と繋がつていてると思われる廊下がある。
僕たちが足を止めていると、

「こっち来いよ」

「!？」

はつきりと聞こえた。

僕の声でもなく、ジャックの声でもない。

多分魔王の声だ。

「ね……ねえ、ジャック……今の声って……」

「うん。多分敵だね」

「多分敵の能力で、脳内に直接語りかけているようだ。

「とりあえず進もう」

さすがに魔王の能力に驚いて、怯えてしまった。

「え、そんなこと言うけど、廊下は沢山あるよ?」

「とりあえず、目の前の廊下を進もう」

「わ、分かったよ……」

僕とジャックは、また進んでいく。

廊下は長く、曲がりくねつていって、薄暗い。

「ねえジャック、どこまで進めば部屋に着くのかな?」

城を外側からは何度も見たが、内装は一度も見たことがない。

「本当にどこまで行けばいいんだろうね……」

僕は、この作戦が終われば、響子と会えるという嬉しさと、魔王が説得に応じない可能性の

不安の、二つの感情が混ざり合っていて、とても複雑な感情だ。

それでも僕は前を見続ける。

すると、前に扉を見つける。

「ジャック! 扉だよ!」

「木く! やつたな!」

ジャックが怯えながら扉を開ける。

「ドアがきしむ音がする。

「キイー……」

扉が開く。

中の部屋は、廊下と同じように薄暗い。

「やつと来たか……ずっと待ってたぞ……」

ジャックの動きが止まつた。

少し震えている。

多分驚いているのだろう。

「ジャック？ どうしたの？」

「さあジャック。来るがいい……」

魔王がジャックに話しかける。

殺されたはずの、本当のお父さんが。

ジャックは困惑している。

今、ジャックは困惑しているだろう。
当然だ。自分のお父さんと戦わなきやいけないかもしないんだから。

魔王は、堂々としている。
だが、作戦はここからが本番だ。

まず、魔王はちょっとイキついて、堂々としているから、作戦Bにすることにする。
作戦Bでは、「魔王がジャックのお父さん」というオチを先に言って、「さすがにそのオチはないよね?」
ということで、その場しのぎで仲直りさせる作戦だ。

ジャックも、魔王も、誰も傷つけさせない!

「……ねえジャック……」

「ん? どうしたの?」

「まさかだけど……『魔王は消えた父さんだっ!』なんていうオチとかじゃないよね?」

「!?

作戦通りだ。ジャックが驚いている。

きっと、図星だのなんだの思ってるんだろう。

ここで一気に畳み掛ける!

「そんなんあるあるな、面白くないオチなわけないよね? ね?」

「い……いや、まさかね! まさか……ね? 俺のお父さんが魔王だなんてね? ね、

お父さん?」

「え? いや……俺は魔王だけ!」

「えいっ!」

おお、まさか殴ってまでお父さんを止めるとは……さすがジャック……。

「痛っ！」

お父さんはかなり吹っ飛んだ。
どうやら耳打ちをしている。

「ごによごによ……」

耳打ちが終わったようだ。

「あ……ああ！ そうだ！ 僕はジャックの父さんだが、魔王ではない！」

ここで、お父さんを永久的に、魔王の座から落とすためにさらに置み掛ける！

「なんだ！ あるあるオチじやなかつたんだ！」

「そ……そ……そ……うだよ！ はっはっはっ……」

ジャックに、一息すらつかせずに更に！ 置み掛ける。

「いやう、あるあるの親子で戦うような感じだつたら、2人まとめて星にするところだつた31

よー！」

「さ、ジャック！ 魔王はいなかつたんだし、家に帰ろうか！」

「そ、そ……うだな！」

ジャックが動搖しているようだ。

効果抜群だな。

「ジャックのお父さんも、家に帰りましょう！」

「お……おう！ そ……うだな！」

お父さんにも効いていいようだ。

「お父さんは先帰つていいですよ！ 僕とジャック君は、少し回つていくので！」

「お、そうか。じゃあ先に帰らせてもらうぜ」

やつた。作戦が成功した。

ここまで来たら、あとは浸食された土地を戻すだけだ。

12 ～本当のこと～

まあ、ネタバラシでもするか……

…………これでいいの？ ジャック……

「え？」

「……これで誰も戦わずに、世界が平和になるの？」

「……知つてたんだね」

「当たり前じやん！ 僕たちを舐めないでよね？」

ジャックは心の中で色々な事を考えているようだ。

えつ？ 「こういうことをしてくれる『人』が、本当の親友なんだろうか」 だつて？

それは語弊があるな。

「人じやなくて木だよ」

「あ、そうか」

あ
やつてしまつた。

心の中で訂正するつもりだったのに、つい言つてしまつた。
まずい。このままじゃ僕の戦術の中にある「読心」を使つていてることがバレてしまう。

そんなことを思つていいうちに、ジャックは小声で何かを言つた。
バレていなければいいようだ。

「え？ 今なんか言つた？」

「いや！ 何でもないよ！」

「あつそう……」

声は聞こえなかつたけど、心の声は聞こえたよ。

僕の方こそ感謝してゐるよ。

ありがとう。

「えー……それでは……植物科と魔族との、平和友好条約の締結式を始めさせていただきま
す」

僕は、植物科のメンバーに、作戦成功であることを伝えて、講和条約の締結式の準備を行
うように伝えた。

そして、締結式が行われた。

「早速ではありますが、植魔平和友好条約の内容について読み上げさせていただきます……
それでは、生きる木さんお願ひします」

「はい。それでは読み上げさせていただきます」

条文が書かれた紙を開いてみたが、意外と長い。

僕はそれを淡淡と読み上げ始める。

植魔平和友好条約

20XX年8月12日

前文

この平和友好条約は、植物科と魔族との間に結ばれる条約ではあるが、これから世界の平和に関する決まりについて定めたものであり、改定及び無効化、これに変わった新しい条約が結ばれない限りは、現存している人間を含む動植物及び、これから生まれる全ての動植物に対して有効である。

第一条

我々は神によつて生み出された、神の子であり、今一度それを確認すると共に、皆が平等であることを宣言する。
平等とはすなわち、争いがない」とを指す。

第二条

魔王は直ちに、永久的にその座を失うものとして同時に、魔王の座を失つた魔族は解散を言い渡す。

植物科は、解散は行わないが、その能力を悪用することを禁止し、悪用が確認され次第、直ちに解散を言い渡す。

本二項の無視、及び違反が確認された場合は、司法の判断を待たずして、一番重い刑を執行する。ただし、司法が素早く判断を下し、刑を認めなかつた場合は、刑の執行は行われない。

第三条

我々は、これからも協力をして世界を平和にしていかなければならぬ義務がある。我々は、公正かつ効率よく、誰もが安心して生活出来る環境を作らなければならない。

第四条

これより、この世界の権力は分散される。

一つは「司法省」。司法省では、動植物に対し、公正に罪を判断し、刑の種類を伝え、執行を行う。

もう一つは「政府省」。法に制限されない限りは、国の全てを管理する。政府省が法に反して

いると判断された場合は、政府省であろうと司法省が刑を下す。この二つの権力の分散により、世界を平和にする。

第五条

本法に反した場合は誰であろうと、司法省が刑を下す。

刑の種類は四種類ある。

一つ目は「保護観察処分」。罪が軽いと判断された場合は、収容などをせずに、保護観察処分として、これからの中生を見守る。

二つ目は「懲役刑処分」。罪が重いとは判断されなかつた場合は、特定の収容所に収容を行¹⁷し、一定期間の間、更生プログラムを施行し、プログラムが終了し次第解放し、これからの中生を見守る。

三つ目は「死刑処分」。罪が重いと判断された場合、罪人は死をもつて償わなければならない。本刑は、通常施行することができないよう、死刑処分までの基準を高くし、もしも刑が施行されるとなつた場合は、関係する者を除いた全ての動植物に対し投票を行い、全会一致だつた場合のみ、刑を施行する。その際、罪人を苦しませた場合は、その者を懲役刑処分とする。すなわち、限りなくこの刑が施行されないようにし、施行されるとなつた場合は、苦しませずに安楽死させること。

四つ目は「無間処分」。本刑は、植物科か魔族の者のみに適応されるもので、世界を重大な危

機を及ぼした場合、または本法の第二条を違反した場合にのみ施行される。「無間」と呼ばれて
いる、一度入った者が帰ってきたことは一度としてない空間に、罪人を送ることが本刑である。
もし、無間から戻ってきた場合は、その者に再び生きる権利を与え、通常の生活が送れるよう
に、我々が保護する。

終文

以上が本法の条文とする。

長かった。

「えー……以上が条文となります。これでよろしければ署名をお願いします」魔王も。僕も。署名を行う。

その字は濃く、生き生きとしていて、まるで世界の平和を願っているようだ。……いや、流石にそれは言い過ぎか。

「ありがとうございます。以上をもちまして、締結式を終了させていただきます。後は、ご自由にどうぞ」

そう言わると、魔王……いや、ジャックのお父さんは、家に帰つていった。その後ろ姿からは禍々しさは感じず、立派なお父さんのオーラを感じた。

「じゃあ、僕もジャックの所にいくつくるねー」

僕がそう言うと、みんなは笑顔で手を振つてくれた。

「ジャックーお待たせー」

そこにはジャックがいた。何か考え方をしているようだ。

「ああ、お帰りー……ねえ、木？」

「ん？ どうしたのジャック？」

ジャックは不思議そうにこっちを見て言う。

「あの中二び……じゃない、かつこいい技の中に世界を戻すとかないの？」やつぱり中二病つて思つてたんだね……僕は皮肉っぽく答える。

「今、『中二病』って言おうとしたよね！ ね！ あ、元に戻せるのに、やる気失せたわ！」

⋮

ジャックは割と本気で謝っているように言う。

「ごめんって！ それより、元に戻せるなら戻してよ！」

「こいつ……話を変えたな？」

「わかったよ。今、植物科の皆と調整してるから、終わったら元に戻すよ。どうせ暇なり家に戻つてれば？」

「ちょっと皮肉を込めていったが、ジャックは微塵とも察せずに話を進める。

「じゃあ、行つてくるね」

「うん！ お父さんによろしく言つといて！」

「うん！」

そう言うと、ジャックは歩いていった。

「じゃあ、会議を始めるよ！」

14 〈作戦会議〉

植物科のメンバーを集めて、会議を始める。
「とりあえず、侵食された土地を戻す作戦の係を決めるねー」
皆がうなづく。

「ひまわりさんの調べで、侵食された土地のコアに、光のエネルギーを一定時間送り続ければ戻せるのよ。これが結構な力を使うんだよ……で、この侵食された土地のコアにエネルギーを送り続ける係は、薔薇っちね」

「大変そうだけど頑張るよ。あと、薔薇っちつていうのやめろって……俺たちだけならいいけど、ジャック君が見てるかもしれないだろ？…………そんなことより、光エネルギーならひまわりが、光属性なんだし、ひまわりの方が適任なんじやねえのか？」

「当然、ひまわりさんが光属性だということを見込んで、別の仕事がある。

「ひまわりたんには、『リストアパッチ』の実行をしてもらうよ。特殊な電磁波を土地に送つてもらうんだけど、その電磁波の事をリストアパッチって言つて……」

「特殊な量子コンピュータだけが、リストアパッチを発信出来るから、その量子コンピュータを扱える僕、かつ電磁波の発生に必要な光エネルギーを一番出せる僕が、その仕事つて事だよね？」木くん？」

「う、うん。リストアパッチ知つてたんだねー」

「話が早くて楽だ。

「で、シロツメ・クサノ介君は、周りの防御ね。最強だからなんでも出来るでしょ？」

「おう」

シロツメ・クサノ介君は乾いた返事をする。

「昔たんは、リストアパッチ実行時に、電磁波の確認と周囲の異常確認をして、もしやばかつたら、ご自慢のスピードで……どうにかして！」

「ええ……」「

「で、チューリッピは、第四の戦術の『ファイールドサイト』を使って、空間を保護して。部外者を入れないよう頑張つて！」

「何ページかぶりに登場したチューリッピには、かなり大きな仕事を任せよう。

「わかったッピ。それより木一さんは、何をするッピか？」

「僕は、指揮官的な？みんなに指示を与える役だよ」

別にサボりじゃないからね？」

「じゃあ、これで良いね。ジャックに電話するよ」

あ、そういえば番号聞いてなかつた。

「ジャック君の番号なら、さつきお母さんのスマホをハッキングして、電話番号は入手したから。あと、名前が出るよう、電話帳に木くんを登録しておいたから」

ひまわりたんは技術開発局かな？」

とりあえず、感謝して電話をかけよう。

「ブブブ……ブルルルル……ブルルルル……ガチャ」

本当に繋がつた。

「もしもし？ ジャック？」

「はい？ どうしたの？」

「いや、世界を元に戻す準備、整つたよ」

「じゃあ、すぐ行くよ！」

「はい、待つてるよ……ガチャ」

「あ！ ジヤック！ 来たね！」
「ふう…。これから始めるの？」

「僕は枝を振つて答える。
「せやで！」

15

リストアパッチ

「じゃあ、定刻通り実施しますか？」

僕はとりあえず計画実施をする。

「じゃあ…。薔薇っちは、コアにダイレクトアタック開始！ 菅さんは、周囲の電磁波の確
認と異常確認を始めて！」

「ういっ！」

「はーい」

コアへの光エネルギーのダイレクトアタックが効いてきた。
地面が揺れている。

「よし！ ひまわりたんのグループは『リストアパッチ』の実行！」
少しずつ地面の揺れが激しくなっている。
同時に地面が盛り上がっている。

「チューーリッピ～ フィールドサイトの稼働状況は？」

「正常に空間を保護してゐるツピ！」

「クサノ介君！ 周りに敵はいないよね？」

「おう！ 大丈夫だよ！」

よかつた。魔王が条約を破つて攻撃してくるかと思つたが大丈夫そ�だ。

いや、魔王はもういないのか……：

そもそもリストアパッチの効果が来るはずだ。
と、同時に地面からエネルギーを感じる。

……来るつ！

「ジャック～ 来るよ！」

地面が盛り上がり爆発した。

土が舞つて、原子ほどの小ささになつて生まれ変わっていくようだ。
同時に自分たちも飛ばされていく。

「わーお……このままじゃ宇宙に行っちゃうんじゃないの……？」

「大丈夫だよ、ジャック～ さあ、戻るよ！」

空に舞つていた土が元に戻る。

同時に、壊されていた建物が構成されていく。

黒く染まつていた土は元の色に戻り、枯れた木には葉が生い茂つてくる。
地面がアスファルトで舗装されていく。

世界が元に戻つてゐるのだ。

「……世界が……元に戻ったんだ……」

「そうだ。世界は元に戻ったんだ。
響子と……また会えるんだ。」

「うん。すごいでしょ？」

「ありがとう」

「えつ……うん！ 感謝したまえ～！」

僕は態度を大きくして言った。

「へっ！ 元の世界に戻ったけど、生きる木は変わらないな！」

「なんじやそれ！」

二人で笑いながら、地面に戻ってきた。

「俺はちょっと周りを見てから、家に戻るよ。本当にありがとう！」

ジャックはそう言つた。僕もそうしようかな……？

とりあえず、お別れをしよう。

「はーい！ なんかあつたらまた来てね～！」

「うん！ ジャ、また今度！」

世界は元に戻ったんだ。

僕は大きな誤算をしていた。

植物科の皆の力で、建物を含めた、浸食された土地は戻ってきた。
建物の中や地下にいて、あの雷の光を浴びていなかつた人達は、戻ってきた。

そう。それだけだ。

外にいて、あの光を浴びた人達は戻ってきてない。

あの雷が落ちたのはクリスマスの昼だ。

外に多くの人がいただろう。

その……リア充が沢山いただろう。

その人たちは戻ってきていなんだ。

響子も。返ってきてない。

もう戻つてくることはないのだろうか。

次の仕事は決まつた。

消えた人たちを元に戻すんだ。

響子を含めた、人類皆を。

友達とまた会うために。

響子とまた会うために。

僕の心境はより複雑になつた。
まずは植物科に戻ろう。全てはそれからだ。

＼＼＼おしまい＼＼＼